

木村文助研究

通信6号

2002
・ 11 ・ 1



錢(賞)

高二 西谷菊江

或る日私が学校を六時間で帰って火にあたってしていると、叔父さんに「お客さん来るから酒買って来い」といわれた。私はもう薄暗くなったから行きたくないが、行きたくないと言え、酒機嫌でいるから叱られると思って、戸棚から一升瓶を持って来ると電気がぱつと点いた。一円五十銭持ったまま町へ出かけて行って、漸く酒屋に着いた。そして一円のを一升買って来たが、七町の所だから長い。後ろを見ても誰も来ない。左も右も田圃で、遠くの方にただ電気の光ばかり見える。暗くなり、次第に淋しくなる。もう二三町行けば家だと思って、一生懸命歩くと途中で、かちんと瓶にあたって落ちた物がある。はっと思って手を見ると銭がない。びっくりして、そこらを見たが、たった十銭より落ちて居なかった。落して行くと叱られるから、又一生懸命でただして(さがして)いたが暗くて見えないから右手で瓶を引きずり左手に手袋をはいて、黒い物があったり円い物があったりすると、銭ではないかと思って掻き回している、又十銭あった。少し面白くなって一問ばかり行くくと今度は二十銭落ちてあった。もう十銭位だから帰ろうかと思つたが、叔父さんが怖(おっかな)いので捜している町の方から人が来た。見ると向かいの林のお父(おぢ)さんであった。私が下を見て尋ねて居たのを見て「何落とした

の」と聞かれたので、「ぜんこ」というと「見えるもんか行くべ」と言つたが私が行かないで又尋ねだすと又人が来たので、聞かれるのがいやで、拾うのをやめて立つて居た。それは私の家へ行くお客さんであつたが、私を知らないで行つてしまつた。少し尋ねたが家で待つて居ると困ると思つて帰りかけると、家の方から人が来た。気が付いて見ると、それは母であつた。いきなり「きくえ、汝又ぜんこ落したべ、なんのじやま(態)して持つて来たば、この間抜けこれや。何ぼ落しても懲りねい。何ぼ落したてな」といわれたので「十銭」と云うと、少し軟らかな声で「十銭ばし(許り)落したてこたらね(こんなに)かがるてな(時間が)汝さ銭持たせば落すし、魂抜けていたべね。今に(やがて)死ぬべね(死ぬだらうさ)」と言われたので悲しくなつて、熱い涙がぼろぼろと落ちた。帰つてから叔父さんに叱られるかと思つたら「今度から気付けで歩け」と思つたよりやさしく言われたので安心した。次の朝早く拾おうと思つて起きて見たら、雪が余程積もつてあつたので、拾われなかつた。(赤い鳥大正13年7月号)

*町とは長さの単位で一町は約一〇九丈

評 西谷さんの「銭」は、どこまでも純素な態度でかざりけなく、よく写しています。落した銭を拾うところから以下お母さまに叱られるところまでの、西谷さんの心理、動作、人々との対触など、すべてがありありと躍動しています。銭を落してがっかりしていると、そのうちに二十銭までも拾い上げたので「少し面白くなつて」又探しつつける、その気持ちの推移だの、又人に聞かれるか

らわざわざさもないふりをして立っているところなぞ子供らしい感情がよく出ていて微笑されます。 赤い鳥（鈴木）

評 懇切周到を極めた赤い鳥の評の外に言うは蛇足の感があります。評よりは註の積もりで所々に編者の言を挿入します。

「少し面白くなって」……大人が見ると訂正したい気もされる詞ですが、地方的に見ると此の詞以外どんな詞が此の気分を現しましう。「少し」など何とも言われぬ微妙無量な味があります。「面白い」に種類は数百千種あるが其の中の特種な一つで淡い光がふんわりした位の意味の言葉です。

田舎の子供は本当に語彙が不足で面白い使い分なんか出来ず、何でも大ざっぱにして居ます。子供ばかりでなく大人もそうです。白秋の「はっぱ」の詩を思い出させます。何でも簡単で間に合つて行きます。当校の子供の文は題目から見ると自然を中心にして書くという事が殆どありませんが、自然描写は至る所にあります。此の文の道路描写の如き一、二行にもはつきり握らされていると思いません。

この作者の特色は「しおらしさ」というので、一貫されていると思います。外面的には賑やかな所や荒っぽい所書いても其の底には子供らしい、無邪気な、同情深い涙がいつも流れています。憎らしいと云う様な事書いても、心底人を憎めない無抵抗な愛が流れています。母にさんさん小言をいわれて一言の口返答もせず、特に死ぬべね、といわれ子供らしい淡い哀愁を感じてなくあたりのしおらしい少女の純朴な、性質がよく滲み出ています。（木村）

『綴方生活 村の子供』は赤い鳥に載った綴り方など89編で構成され、其の内16編に木村の評が付され「銭」は最初です。

二〇〇二

四・一「木村文助研究」通信五号発行

五・六 大正昭和の児童文芸誌「赤い鳥」掲載 大野尋常高等小入選作品を録音計画（北海道新聞）

八・二二 町郷土資料室「赤い鳥・木村文助」コーナー、広い部屋に移設

八・二〇 講演会・交流会「木村文助の人となり」と綴り方教育のねらい」講師：京都佛敎大学教授岡屋昭雄氏、町中央公民館

八・二二 岡屋氏、森町へ出向き木村家墓へお参りし、図書館の木村関係資料を調査する

八・二〇～二二 フリーライター阿部貴美子氏、綴り方調査に入る

八・二二 広くなつた「木村文助の部屋」大野町郷土資料室（函館新聞）

八・二四 木村文助の先進性評価 岡屋氏招き教育思想学ぶ（函館新聞）

九・六 木村文助の業績披露 岡屋教授招き講演会（北海道新聞）

九・七 岡屋氏より木村資料届く

九・二三「ほっかいどう百年物語」木村文助（STVラジオ放送）

一〇・一 連載 赤い鳥に載つた大野の作文（町教育広報）

一〇・一〇 児童文芸誌に掲載された地方色豊かな作文は町の貴重な宝物（みなみ北海道タウンナビ誌）

木村文助の業績披露

大野町
文保研
岡屋教授招き講演会



大野町文化財保護研究会(ぶんぼけん)はこのほど、町中央公民館で文化講演会を開き、京都仏教大学の岡屋昭雄教授が「木村文助の人となりと綴(つづ)り方教育のねらい」と題して、町民、

郷土史家、教員ら四十人を前に話した。木村は一九二〇年代、大野尋常高等小学校校長兼

訓導で、斬新な学校経営に取り組むとともに、つづり方指導に打ち込んだ。

文集や論文を数多く残し、つづり方を全国に広めた。

岡屋教授は「(木村さん)は子供たちに、自分で考え、人にも分かるようにとつづり方を書かせた。『悩みのない修身はない、修身は悩みから生まれる』と名文を残し、つづり方と修身とを結び付けた指導観は今も生き続けている」と述べ、「青年たちには課題を与えて討論させ、人間としての価値観を鍛えた」と紹介。また、「彼のつづり方指導は一部の人たちには、

理解されなかつたりしな」と話した。講演を聞き、木村先生

の業績は大野の宝であり、多くの人に知ってほ

講演には会員、町民、町長、教育長、教育委員長、小学・大学教員、また函館、七飯、上磯、南茅部の各市町の郷土史家など参加し熱心に聴講した。

しいと痛感した。
大野町本町

ぶんぼけん会長
木下 寿実夫(六五)

町郷土資料室「赤い鳥・木村文助」コーナーは、昨年町教育委員会が設置し今年はまだ広い部屋に移りました。『赤い鳥』(復刻版)全巻、文助の編著書(コピー)及び論文、岡屋先生の論文も含め本・ファイルなど250点ほど備えてあります。どうぞ閲覧にお出で下さい。



資料閲覧(赤い鳥・木村文助「一ナ」)

「大野町郷土資料室」

町市街地に入り大野小学校の校門を入れて右側の

建物です

○四一―二二〇一

北海道亀田郡大野町本町二〇〇

TEL(〇一三八)七七・六六八一

・開館：九・〇〇～一二・〇〇

一三・〇〇～一六・〇〇

・休館：毎月第一月曜、臨時、年末年始

・函館市から国道二二七号に入り大野町市街地まで、車で20分です。

・道北方面からは車で、国道五号の大沼トンネルを抜け、5分ほどして大野方向に右折し10分で着きます。

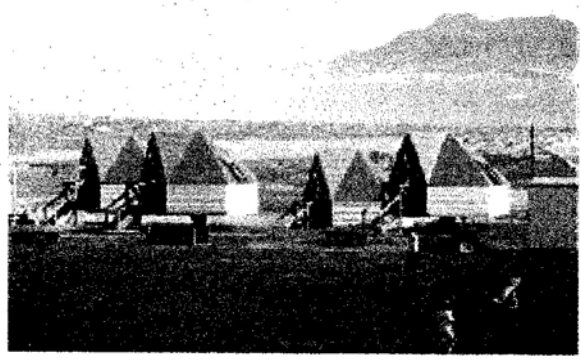
○四一―二二〇一

北海道亀田郡大野町本町六八

木下 寿実夫

(〇一三八)七七・八五三五

大野町文化財保護研究会(ぶんぽけん)



連載

赤い鳥に載った大野の作文

町史編さん室



「赤い鳥」が載った「櫓」
大正11年8月号

今回から、大正から昭和のはじめにかけて童話作家の鈴木三重吉が発刊した児童文芸誌「赤い鳥」に掲載された当時の大野小児童の作品を連載します。

赤い鳥には、大野小から五十九点の作文と三十五点の絵が掲載されましたが、その中から赤い鳥で「入選」となった作品を中心に紹介します。

第一回目は、大正十一年（一九二二）八月号に載った新榮とよさんの「櫓」です。この作品は、大野小初の人選作で、鈴木三重吉も丁寧な選評を付けています。

「櫓」(賞)


大野小高一 新榮とよ

いつかの冬のことであった。私はまだ小さい時であつたから、はつきり分らないが、家の兄さんが友達と三人で遊んでいた時、櫓が来たので、二人の友達、兄さんの知らないうちに、家の小さな櫓を持って行って、その走って来る櫓に付いたら、馬追に怒られて、驚きのあまり、そのまま馬追の櫓に付けてやつ

たのを、家の兄さんが見て、その櫓を持って行かれると大変だから走って行ってとろうとした。すると馬追は、兄さんが付いたのかと思つたのであろう。いきなり兄さんの目の少し下の方を、あの鋭い手綱でたたいたので、痛いから逃げたら、運悪くも川の中に落ちて、着物はどつぷり汚し下駄は流れた。下駄はよその人が取ってくれたが、兄さんはおいおいと泣いて来たので、母達は兄さんからその事を聞き、さつそく馬追を家に連れて来た。馬追はあやまろうともしないで、庭にぼっかりとして立つてあつた。

それが家の父や上の兄さんと馬追と三人で大声を立てて争つてあつたが、馬追がきかないので、上の兄さんが大變怒つて、「そぐすぐすくすくしているなら、分署にあべ(行こう)と、ひっぱるようにして連れて行こうとしたら、今度は馬追もおつかなくなつたと見えて「分署に行くことは許してくれ」とか、色々なことを言つて、何度も手をついてあやまつたので、許してやつ

木村 文助 校長
(1882~1953)



明治15年、秋田県落合村生まれ。同35年に秋田師範学校を卒業し教員となった。同44年、29歳で校長として赴任し大野小の校長として赴任し昭和3年まで務めた。その後、砂原小、戸井の日新小の校長を歴任し、昭和13年に退職。札幌で国語の先生をしたが、昭和28年、森町で生涯を終えた。72歳だった。

「赤い鳥」に大野小の子供たちの作文や絵などを投稿し、その作品が次々と入選。昭和2年にはこれらの作品を集大成した「村の子供」(文園社)を発行している。作品には家庭や村のできごとが、ありのまま全部題材となっており、当時の村の生活を知る上で大変貴重な史料である。郷土資料室に町文化財保護研究会が収集した史料を展示する「赤い鳥・木村文助コーナー」がある。

友達のため兄さんは、いらない(しなくともよい)けがした。何、兄さんでも付けたんであるまいし、兄さんが櫓を取りに行つたばかりで痛い思いをしたと思うと、友達をにくくてしようがなかつた。また、いくら付いたつて子供のことだもの、そんなに怒らなくてもいいと思う。こんな人はどんな恐ろしい心を持つているであろう。私は小さいながらも兄さんが可哀そうではなかつた。今でもその人をふむくつてけがしたい気がする。

友達のため兄さんは、いらない(しなくともよい)けがした。何、兄さんでも付けたんであるまいし、兄さんが櫓を取りに行つたばかりで痛い思いをしたと思うと、友達をにくくてしようがなかつた。また、いくら付いたつて子供のことだもの、そんなに怒らなくてもいいと思う。こんな人はどんな恐ろしい心を持つているであろう。私は小さいながらも兄さんが可哀そうではなかつた。今でもその人をふむくつてけがしたい気がする。

※漢字や仮名遣いは現代風に改めています。

北海道の大野小学校からは、新榮さんの「櫓」を入賞にしました。ありのままをよく書き上げています。とかく年級の上の人は下等な表現にかぶれたり、こまじやくれた書き方をします。

【馬追】客や荷物を馬車や馬車で運ぶ人で、この時代は馬が車の代わりに活躍しました。

【櫓に付く】馬追の馬そりに子供たちが自分のそりを引つけて滑る遊びで、当時はよく行われていたようです。

【分署】当時の大野の警察署。

【ふむくつてけがしたい】「ふむくる」は「つねる」「むしり取る」の方言ですが、この場合は「引きちぎつてやりたい」という解釈が自然です。